

P2M コラム (1)

軍事研究

吉田 邦夫 (東京大学名誉教授)

「戦争がつくった現代の食卓」(白揚社、2017) という面白い本が出版された。ボストン郊外にある Natick Soldier Research Development & Engineering Center (NRSDEC) という軍事用の食糧を開発している研究所の活動を紹介しているものである。アメリカにはベル研究所や IBM 研究所など世界の技術開発の先端をいく素晴らしい研究所があることは良く知られているが、このネイティック研究所の名前を聞いた人は居ないのではないか。軍事用食糧を英語で combat-ration と言う。このレーション開発のために、莫大な軍事予算から巨額な資金を得て、MIT など主要大学との共同研究も含めて多分野の研究が推進されている。

ナポレオンが戦時の食糧携帯法を考えよ、と出した懸賞金に対する優勝発明品が缶詰であったことは有名である。しかし、私達が忙しくて食事時間が取れないときに、とりあえず食べるカロリーメイトが、実は軍事用として考えられた技術が民間に払い下げられたものであるとは誰も考えたことはないであろう。第1次大戦の塹壕の中で、火も無く水も無い中で食べられるものを考えた時から、今日の宇宙船の中で食べられるものを作るまで、持ち運び易く、直ぐに食べられて、常温で長期保存でき、価格が手ごろで、誰でも好き嫌い無く食べられるという性

質が追求されてきた。この間、冷凍乾燥技術やプラスチック包装など多くの技術が、実はネイティック研究所が中心となって開発し、民間へと技術供与されてきたとは驚くばかりである。問題は、そうして作られたものが、軍事用であるだけに決して医学的に見て健康的でもなく、新鮮さも無視され、環境に対する優しさも考慮されないままの食糧であるにも拘わらず、コンビニやスーパーに並び、子供も含めた一般人が食べていることにある。

今、我が国の大学では運営費交付金が大幅に減額される中で、防衛省との共同研究を容認しようとする動きがある。全ての研究は dual use の側面があり、使い方次第で、どのように残酷なものにもなりうるが、研究者個人がしっかりとした倫理観さえ持っていれば大丈夫だとする。しかし、上述の例の様に健康的ではない食糧が大手を振るってまかり通っている現実を見ると、今更ながらに研究者の倫理観に任せることへの危惧の念を禁じえない。週刊誌“Wedge”の最新号 29 巻 12 号のトップ記事は「国立大学の成れの果て」である。ついに、ここまで落ちぶれたかと思わず失笑した。だが、若い研究者達に、先の見えない生活を強いるばかりの状況では、そうなることもやむを得ないのであろうか。